

置き去りにされた三種の神器の意味 鈴木幸一 IIJ会長

2017/9/26 6:35 | 日本経済新聞 電子版

「10月からイタリア語の勉強を始めますよ」

「イタリアオペラも、イタリア語で書かれたモーツァルトのオペラも、イタリア語のリズム、ニュアンス、ダブルミーニングが多い言葉そのものが理解できないと、おのずと限界がある。それだけイタリアのオペラが好きなのに、なぜ、イタリア語を習得しようとししないの」――。大指揮者リッカルド・ムーティーさんには、10年以上もお世話になりながら、一向にイタリア語を解しないまま、なんのかのと言い訳を続けていたのだが、五十の手習いどころか、七十の手習いになる今さら、一大決心をして、いよいよ勉強を始めようかと思っている。年をとればとるほど、脳の容量がしぼむのか、脳の活動量が減るのか、記憶力の衰えは日々、自覚せざるを得ないほどになっているのだが、それでも10年来の約束だからと、本当に始めようと思っているのだ。忙しい、時間がないと言い訳を繰り返しては、なにも始めようとししない自らの怠惰な性格に、一度くらい立ち向かってみようという心持になっているのである。

まず、酒量を半分にし酒席の滞在時間を短くする。昔から、朝は4時前には起きるのだから、夜明け前からの長湯の折は、必ずイタリア語の教本を風呂で繰り返し読む。脳の衰えは、費やす時間でカバーするほかない。ま、「三日坊主」とか、「年寄りの冷や水」といった言葉が、すぐに具体的な結果として待ち構えているのだらうという自覚はあるのだが。

■苦かったウイスキー

子供の頃から好奇心だけは強く、睡眠時間を多く必要としない体質もあって、手当たり次第に本を読んできた気がする。その日その日の気分によって読む本が決まるだけだから、なんら系統的に読んできたわけでもなく、およそ、学問には適さない性格だった。「君はこの年で、もう雑学の大家だねえ。学者にはいばん向かない性格かなあ」と、大学時代にお付き合いをいただいていた教授から揶揄（やゆ）されていた。「雑学の大家」。つまり、なにひとつ深く研究することがないということの裏返しである。以来、多分野のことを浅いレベルまでは、かなりの速さで物事を理解するのだが、本質的な理解をしているかどうかは疑わしいものと、自らの知識を疑うことが習性となっている。



鈴木幸一（すずき・こういち）1946年9月生まれ。国内インターネットサービスの草分け。インターネットイニシアティブ（IIJ）を設立し、郵政省（現総務省）との激しいやりとりの末、93年にネット接続サービスを開始。後に続くネット企業に道をひらいた業界の重鎮。酒、タバコ、音楽と読書を愛し、毎春、東京・上野で音楽祭を開催する。近著に「日本インターネット書紀」がある。

学生時代、飲み代欲しさにシステム論やコンピューターに関する英文の翻訳のアルバイト（もちろん下訳にすぎないのだが）に時間を使うことが多かったのだが、ある時、親しくさせていただいていた科学評論家の方に紹介され、出版社の経営者とご一緒する機会があった。「君も、飲み代稼ぎに終始しているのではなく、フォン・ノイマンでも訳してみないか」。もちろん、私の能力に余る内容であるということは十分に承知していたのだが、自堕落でいいかげんな生活に飽きてもいた時期で、酒の勢いも借りて、ついつい引き受けてしまったことがある。3分の1は数式による説明で、本文はそう長いものではなかったのが、なんとか、ひと夏を費やして努力をしたのである。

9月になって、一応の成果物を持って指定されたバーに行ったのだ。拙劣な文字を気にせず30分ほど読んで頂いたのだが、「鈴木君、一応日本語になっているけど、理解をしていた？」という質問である。「本文は、暗記したほど記憶をしています、理解はしていません」と答えるほかなかった。「そうだろうな。難しかったかなあ」。当然のことながら、ひと夏の報酬はゼロで、ウイスキーをごちそうになったただけだった。せめて、費やした労働代くらいは期待をしていたのだが、それを言い出すことすら恥ずかしいような理解度だったのである。浅く、速いだけでは、物事の本質を理解するに至らないことを十分に知りながら、なぜ、それを見破られるようなことをしたのか。反省よりも、そのことにじくじたる思いをしたまま、黙って飲み続けていた。苦い記憶はいつまでも脳裏から消えることがない。人間の記憶装置というのも、意地悪につくられているのである。仕事の記憶についても同じである。

■インターネットの想像を絶する可能性

「インターネットについて、その将来の可能性、本質を考えるたびに思うのは、逗子の海岸から太平洋の全容を語るようなもので、せいぜいが、相模湾の視野程度にしか考えられないのが残念である」。8年ほど前にこのブログを始めた頃、そんなこと

を記した記憶がある。その後、クラウドに始まってAI、IoTといった言葉に象徴されるように、技術革新の進展にともなって、利用領域が一気に広がり、新しい可能性が具体化されつつあるのだが、それらは、あくまで大きな流れに浮かんでくる様々な要素にすぎない。情報と通信が同じ技術基盤となることで具体化していく仕組みのひとつでしかない。「しかない」という言い方は誤解を与えてしまいそうなのだが、国や各企業がこれらの技術を前提として、仕組みを作り直そうとすれば、人びとの働き方や労働の本質、労働市場の仕組みを根本から変えてしまうに違いなく、それは時間軸を競う問題にまでなっている。

ビジネスという視野で考えれば、それらの進展に沿った時間軸、空間といった概念は根本的に変わるわけで、その認識を根幹に据えて、国の政策や事業を考えればいいだけの話である。「いいだけ」といっても、それは大変なことなのだが、ついつい「いいだけ」といった言葉を使いたくなるほど、インターネットという技術革新が世界を変容してしまうスケールは想像を絶する可能性を持っているのである。究極的には、人間の長い歴史が、この技術革新によって、人間のあり方そのものすら変えてしまうスケールの話かもしれない。それゆえに、雑学に埋没してきた私の脳の容量では、逗子の海岸から太平洋の全体を視野に入れるようなものだというあきらめが先に立ってしまうのかもしれない。IJJを設立した25年前に抱いていた将来への不安から、私の視野が、そうひらかれているわけではないという思いを抱いてしまうのである。

■正直、慈悲、知恵

ITについて、あまり考えたくないという思いが強くなると、手当たり次第に関係のない本を手にしては湯船につかる。「大日本者神国也。天祖はじめて基をひらき、日神ながく統を伝給ふ。我国のみ此事あり。異朝には其たぐひなし。此故に神国といふなり」。南北朝時代、南朝の後醍醐天皇の側近であった北畠親房が、劣勢を挽回し反撃するために、関東・東北の武士たちを組織化しようと、常陸地方を転々としながら筑波山ろくで書き上げたという「神皇正統記」（岩波文庫）の有名な冒頭の文である。

蒙古の来襲が13世紀のことだから、神風だとか、神々が日本を守ってくれるという神国といった言葉は、来寇を恐れた朝廷や公家、武家が、調伏を神仏に祈る際の願文に使ったといわれている。「核の開発によって米国と力の均衡を図る」と啖呵（たんか）を切っても、大モンゴル帝国に比べれば小国である北朝鮮の大陸間弾道ミサイルから日本を守るために、「神国」という言葉を使って願文を使うはずもないのだが、たまたま、湯船に携えていったこの文庫本を何年かぶりに読んでいたのである。興味深かったのは三種の神器についての長々しい説明である。三種の神器とは、よく知られているように、天照大神がにぎのみことと与えた鏡、曲玉、剣のことである。鏡、曲玉、剣の三種の神器の意味を端的に記せば、鏡＝「正直」、玉＝「慈悲」、剣＝「知恵」のことで、もっとも重要なのは鏡であり、「中にも鏡を本とし、宗廟の正体とあふがれ給。鏡は明をかたちせり。心性あきらかなれば慈悲決断は其中にあり」としている。要は、天皇をはじめとする統治者は、この三つのことを神器として実践すべきであるというのである。しかもその理念を世界の中心に据えようというグローバルで普遍的な統治原理なのだ。「神皇正統記」は、南朝の臣下として守るべき後醍醐天皇よりも、その神器の使い道ばかりが強調されているような気もするなどと夢想をしているうちに、のぼせてしまうほど長湯をしてしまった。

イタリア語の教本も、この本を読みふけるほど熱中すれば、七十の手習いもいい結果となって、ムーティーさんを驚かせることができるかもしれないのだが、すぐに忘れてしまう雑学に尽きてしまう私の能力では、前途多難という言葉しか思い浮かばない。それにしても「正直、慈悲、知恵」ほど、日本ばかりでなく、現在の世界の政治において不似合いな言葉はない。統治者ばかりでなく、統治者によって恩恵を受ける側の人々の気持ちからも、三種の神器を思い起こす振る舞いは、消えてしまっている気がしないでもない。皇室の話は別として、選挙も近いようだが、「正直、慈悲、知恵」を選挙公約に掲げて、ポピュリズムに訴えるはずもない。IT化の巨大な流れをしばし忘れて、本を読んでいるのは、私にとっては、休日のささやかな楽しみなのだが。

鈴木幸一 IJJ会長のブログでは、読者の皆様からのご意見、ご感想を募集しております。
[こちらの投稿フォーム](#)からご意見をお寄せください。

鈴木幸一IJJ会長のブログは毎週火曜日に掲載します

